

# 今こそ、創造的な学び手の育成を

会津大学 文化研究センター長 教授 **かりまざわ はやと** 蒔間澤 勇人



## 顕著に見えた、人の「弱さ」と「強さ」

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、私の勤務する大学でも通学が制限され、各地で行う予定だった教員向け研修会は、延期や中止を余儀なくされました。

学校に行けない、社会が動かない——この思いもかけない事態は、人の「弱さ」と「強さ」を顕著に浮かび上がらせました。先が見通せないために不安に駆られ、他者や社会に悪影響を及ぼす行動をしてしまう「弱さ」が見られた半面、外出自粛要請に対して、自分ができることに精いっぱい努め、社会に貢献しようとする大勢の人の姿を目の当たりにして、人の「強さ」にも改めて感心しました。

私の出身地であり、今も暮らしている東北地方では、2011年の東日本大震災で大変な困難に直面しました。この9年間、人々がつながり、助け合って乗り越えてきた経験は、緊急事態宣言下で十分に生かされていたと感じます。今、私たちがしている経験も、予測できない未来を生き抜く強さへと結びつくはずです。そうした強さの素地を培う上でも、教育が果たす役割は非常に大きいと考えています。

## 学習の遅れよりも気にかけていることがある

学校の臨時休業中や制限された環境において学んだことは、決して「損失」ではありません。授業が再開して、学習の遅ればかりに目が行ってしまうかもしれませんが、今だからこそできる学びもあります。

例えば、外出自粛中は、多くの家庭で家族と一緒に長い時間を過ごしました。その間、この先の生活や将来への展望について家族で話したり、保護者が在宅で働く姿を間近に見たりして、子どもにとっては自分のあり方や生き方を考える機会となりました。昨今、学校教育が担っていたキャリア教育が、凶らずも家庭でなされたのです。それを一時的なものと思わず、今後も家庭でキャリア教育を続けられるよう、子どもや保護者に働きかけたいものです。

今、学校に期待されている役割は、子どもが今を肯定的に捉えて学びに向かえるように働きかけ、その学びを支援することではないでしょうか。学力とは何か捉え直し、子どもが自分の目指す方向に進んでいくために、家庭ではできない学びを支援する学校へと変化するチャンスなのです。

日本では、ICTの利活用を前提とした超スマート社会\*が提唱されていますが、その実現には、人と人との直接的

な触れ合いを通じた信頼関係の構築が欠かせません。自粛生活は、人間関係の基礎である家族のつながりを見つめ直し、家庭教育の大切さを改めて認識する機会となりました。他者に対する信頼感は幼児期までに育まれる部分が大きいですから、今後、幼児教育を重視する動きが一層強まることを期待します。

## 子どもに何が起きているか、いま一度見つめる

昨日までの生活が一変してしまうという現実を、日本中、いや世界中の人々が経験しました。以前のような日常に戻ったとしても、子どもを取り巻く環境は既に大きく変化しています。しかし、新しい環境に対応した教育モデルはどこにも存在しません。学校には、子どもに伴走しながら、子どもや地域の実情を捉え、状況に応じた目標やカリキュラムを生み出すために試行錯誤を続ける使命があります。教育委員会や学校の管理職の先生方は、特にそのことを心に留めて、前例にとらわれない学校づくりに努めていられることを願っています。

学校教育が変化するためには、新しいものを取り入れる姿勢が大切ですが、同時に、長く受け継がれてきた日本の文化や伝統に目を向けて、子どもたちに引き継いでほしいとも思います。東日本大震災からの復興においても、地域に根づいていた文化、ふるさとへの思いや誇りが、人々の精神的な強さにつながることを感じたからです。

今だからこそ、先生方がより広い視野を持ち、一人ひとりの子どもの実態をしっかりと捉え、成長を支えることで、目の前の課題を自ら解決しようと努力する「創造的な学び手」が育っていくことでしょう。その方向性は、新学習指導要領が目指す教育とも重なります。そうした教育活動の積み重ねが子どもの豊かな人生を形づくとともに、持続可能な社会の実現へとつながっていくに違いありません。

かりまざわ・はやと◎岩手県の公立高校教諭として28年間勤務した後、2015年度から大学教員に。専門分野は、教育学、教育カウンセリング心理学。理工系単科大学で教員養成に携わる一方で、全国でカウンセリングや学級経営等の研修会の講師を務める。共著に『組織で支え合う！学級担任のいじめ対策』（図書文化社）など。本誌2019年度 Vol.4の本コーナーに登場。

\* 必要なもの・サービスを、必要な人に、必要な時に、必要なだけ提供し、社会の様々なニーズにきめ細かくに対応でき、あらゆる人が質の高いサービスを受けられ、年齢、性別、地域、言語といった様々な違いを乗り越え、生き活きと快適に暮らすことのできる社会のこと（内閣府「第5期科学技術基本計画」より）。